

最優秀賞 題名 偏見のない世の中へ

涌谷中学校 二年 渋谷 那南

私の曾祖母は認知症で施設に入っています。私が会いに行っても名前はもちろん私のことが分かりません。それに何度も同じことを言ってしまう。病気になってしまい、こんな姿になってしまった曾祖母のことを「かわいそう」と私はつい思ってしまう。私のことを覚えていなかったという悲しき、もう私の知っている曾祖母ではなくなったという辛さで私の心は押しつぶされそうになりました。

そうした思いをもった中、今年の五月に職場体験がありました。最初に職場先を決める際、体験したい職場と連絡がつかず、「ゆうらいふ」という介護施設に行くことになりました。最初私は不安でした。曾祖母と同じ認知症の方々と上手く接することはできるだろうか。何度も同じことを言われたら上手に対応できるだろうか。そんなことばかり考えていました。

そんな不安を抱えて迎えた職場体験一日目。私たちは認知症のある利用者の方々と交流しました。やっぱり何度も同じことを言ってきたり、私たちに比べると自分でやれることも少ないです。けれど、介護士の方々は認知症だからといって全てをやってあげるのではなくて、やれることは全て自分でやるようにし、そのサポートを行っていました。私は最初、認知症の方々のことを手助けすることが仕事だと思っていました。そして、認知症になった人はかわいそうで不幸だと決めつけていました。でも実際に職業を体験してみて、認知症の方々はそうした目で見ながら接してはいけないと思いました。確かに、認知症の方々は何回も同じことを言ったり、自分たちよりはやれることが少なくなっているかもしれませんが、しかし、今自分でできることを精一杯行っています。また、歌や体操を行なっている時の利用者さんはずっと笑顔でした。認知症という病気をもっているけれども、みんな今を一生懸命生きているのです。「かわいそう」と思って接するよりも、一緒に笑顔で「今」を過ごすことが大切なのではないかと気付かされました。

私は今まで認知症、障害者と聞くと、私たちよりもできることが少ないから不幸だとか、かわいそうだとか思ってしまうことが多かったです。私のようにそう思っている人は少なくないと思います。でも、実際は病気をもっていたり、体の一部が不自由なだけで自分たちと同じように精一杯日々の生活を送っているだけだということです。自分たちより不幸だ、自分たちとは違うのだといった偏見をなくし、そういう考えを変えなければいけないと思います。そうしたら、少しでも接し方が変わってくるのかなと思います。

今度、曾祖母に会いに行く時は私のことを覚えていなくても、笑顔でたくさんはなせるようにしたいです。だって、不幸やかわいそうと思って接しても曾祖母は嬉しくないと思うから。私が笑顔で接すれば曾祖母も笑顔で返してくれるはず。そして私のことが分らなくても私が曾祖母を好きだという気持ちはきっと伝わると思います。私はこれからたくさんの方が笑顔で幸せな生活を送られるような社会にしていきたいです。そのために相手のことを決めつけたり偏見をもったりせず、誰とでも笑顔で接していきたいと思います。